

「赤子之心」もう一度

丘 哲治

30年以上も前の話になりますが、まだ中学生の頃、おじの病院で「良相良医」という額を見ました。当時の正直な感想は‘Why?’という感じでした。それをおじに質問しましたところ、返ってくる説明を聞いてもどうも意味はちよっといまいち、分るようで良く分かりません。でも、幼い心の中にすっかり信じ込んでしまいました。また、何年か経って大学の入学式で初めて校歌を歌わされた時「上医医国」という文言が歌詞の中にもりこまれていることが印象的でした。再び‘えっ?’という感じでした。やはり世間はこのように医師を見ていて、そして、医師はそうであるべきなのかと思いました。

あれから30年経った今、振り返ってみると、あの「良相良医」と「上医医国」という言葉に隠されている意味をなんとなく‘なるほど’と思うようになりました。自分が「良医」に相応しているかどうか、自分もよく分かりません。無論「良相」になることはもっと不可能でした。来日20年の間、研究、就職、開業等があつて、その間「良相良医」と「上医医国」という文字はすっかり脳みその何処かに消えてしまいました。ちょうどその頃、多くの先生方が台湾のWHO早期加入問題で悩んでいらっしゃいました。自分もこの年齢になって、台湾の為に何か出来るかと思って、思い切って台医連の設立に携わりました。

この秋分の日で、日本台湾医師連合は早くも一歳半となりました。当初台医連が産声を上げた時、期待と激励の声が多数寄せて来ましたが、その反面、冷ややかな声も耳にしたこともありました。しかしながら、この温度差は発起人達が信念と熱意で見事に撥ね退けたように思います。確かに音楽会は結構楽しいし、ジュニア会もシニア会も素晴らしい発想です。わざわざ別の会を成立しなくても良さそうなものかも知れません。ただ、こういった会は、ほどんと我々自分自身の為にある会で、何か物足りないような気がしないでもないのです。医師だけが国を治まる能力があるとは限らないのですが、祖国台湾の為、より多く同じ志を持つ先生がもう一回り、二回りくらいも大きなスケールの会を作れば、皆が一致結束してより大きい力が発揮できると先生方が思ったのです。多分これは台医連が誕生した背景でしょう。

台医連成立後、多くの仲間と諸先輩に「君らは時代遅れだ、もっと現実を見つめなさい。」と忠告されたこともしばしばありました。けれどもわたしは敢えて「赤子之心」という言葉を持ち出して、台医連の宗旨、目的と運営方法を説明しました。台医連が決して何かをして、その代わりに何かの見返りを期待しているような団体ではないと、わたしたちは今も信じております。無駄な努力になるかもしれませんが、しかし台医連の出発点はすべて「台湾」という二文字に集約されています。「台湾」の為、会員と役員が診療の合い間に時間や自費を投じて、智慧を絞ったことに悔いはないと思います。

この一年半の間、台湾のWHO加入問題や、SARSで台湾への支援物資を送る活動や小沢一郎、岡崎久彦、古森義久諸先生の講演会等に通じて、台医連は少しずついろんなことを学んできました。役員の方先生方も集会を重ねる度に、会の運営方法について自信をつけてきました。未熟なところはまだまだ沢山あると思います。道のりはまだ長いですが、一步一步、少しずつ日本社会の中で

台湾を皆で応援して行きたい。台医連の運営については「赤子之心」を持って当たっていけば、台医連がもっと多くの先生方に賛同されるようになるのではないかと近頃つくづく思う次第であります。そして、より多くの「赤子之心」を持つ先生方が入会され、台医連と共に台湾の為、一緒にがんばっていく事を期待しております。

ひよっとすると、これはわたし個人の思い込みにすぎないかもしれません。誤解もしくは見解の違うところあれば、何卒、お赦し頂ければ幸いと存じます。

SARS 的 廻 嚮 與 病

毒 (Virus)

東 昌明

7月5日随著台湾 SARS 的解除、WHO 也提出了全球性 SARS“終息宣言”。實際上、SARS 真的消跡匿息了？除了 WHO 外、相信没有人作這麼樂觀的想法。

5月23日、ミネソタ大学感染症策研究センター所長 Michael Osterholm 在美国議会上院公聴会上作了下述証言：「SARS 不是那麼容易終結的、4、5個月後、必然再度現身、必然造成全球性大規模的流行蔓延。」其理由如下：

SARS Virus (Coronal virus) 是感冒病毒的變種、由患者飛沫、埃等接觸介

由空氣經鼻粘膜、呼吸器組織而感染。在低溫乾燥的冬季將大顯身手無從防犯。

感染力的強弱與季節有非常密切的關係、目前只是一時沈靜而已。

想要了解它的真相、因此從四月初便開始著手收集有關病毒的資料、希望藉 SARS 演變過程、以及截至目前為止地球上出現的大規模流行的感染症例作立

足点、对病毒作一探讨、若有疏漏之不适当处请多包含指正。

2002 年 11 月中旬、SARS 疫情由南中国广东佛山爆发、無聲無息的侵透蔓延到其它地区。在今年 2 月 21 日、广州中山大学医院肺部专科医师刘剑伦教授帶著病毒的躯壳去香港参加姪儿的婚礼、住进京華国际酒店（Metropole）911 室、由此揭开了 SARS 的面纱。

首先他把 SARS 病毒感染给 8 位其他房客。其内涵为：

3 位加拿大人、3 位年青的新加坡人、1 位香港人、1 位美籍台商 Jonny CHEN

因商务由香港赴越南河内。由此辗转传播到世界角落。

刘本人因发烧呼吸困难、住进香港广华医院。入院时曾要求医师将他隔离、因

为他想起了在他的家乡已有不少人死于这种疾病（此段对话如属实、

SARS 病毒

早期存在的事实就不容否认）。因此院内工作人员並沒有受到感染、他本人于 3

月 4 日过逝。

来自加拿大的其中一位妇人 Kwan Sui-Din 、3 月 5 日去世于多倫多的医院。

把病毒“传给”的儿子及 5 位院内工作人员。

来自新加坡的 3 位妇人在 2 月底返回居住地、分别于 3 月 1 日～

3 日住進 3 家不

同醫院。其中 2 位並沒有造成很大困擾、但是第 3 位、 Esther Work 、
却變成

“毒王”（ great spreader ）、至少感染了 3 9 0 人。 本人是康復
了、但是雙親却因
此而亡。

美籍台商、 Johnny CHEN 2 月 26 日癸病住進越南河內醫院
（法屬貴族醫院）、

也造成了 20 幾名院內感染、其中包括 Dr. Carlo Urbani 。

根拠 ICTV （病毒分類國際委員會 International committee on
toxonomy of viruses ）每四年一度發表的最近的報告中、目前人類已認知的病
毒超過四千種、而實際上真正能把握其特性的只有其中一小部分。對於病毒の進
化關係、仍然是陌生的領域。因此截至目前、對於病毒的分類方法並沒有一定的
共識與見解。以表現型來分類者有之、依基因型來定論者也不少（目前大多數的
學者傾向于此方式）。

病毒（ virus ）它是屬於微生物、微生物本身並不是一個生物分類學上
的專有名詞。有些專家認為它是一個複雜的大分子、也有些專家認為它是簡單的
生物。因此實際上它既不是生物也不是無生物、而是介於其中。它的粒子非常小、
大約是細菌的 10 分之 1、通常以奈米（ nm ）來作為測量的單位（ 1
奈米是 10 億分之 1 公尺）。大小懸殊、大的如牛肉痘病毒約

300nmx250nmx100nm 。小的如菜豆畸病毒約 9 ~ 11nm 。

SARS 病毒粒子（球形粒狀）屬中間型約 100nm 、結構非常簡單、由單一類型核酸（DNA or RNA）組成核心、外層圍繞蛋白質組成的衣殼、有的病毒具有包膜。但是它本身既無產能的 Enzyme 、也沒有核糖體、因此無法進行分裂增殖、複製、只能借助于宿主活細胞的合成代謝系統為它複製核酸與合成蛋白質以繁殖子孫。

各種病毒究竟如何使宿主細胞死亡或轉化、其運作機制（mechanism）比我們了解的還要複雜。目前多數的微生物病毒學專家對病毒的看法、認為是一類起源于細胞某些能獨立存在的核酸片段、高度進化為具有生物屬性、能獨立存在的遺傳基因。新的病毒不斷的從各種生物的基因體逸脫、轉化、使所有生物基本上都有一種或多種相應的病毒。

SARS 疫情流行蔓延間、香港某學者首先提出白鼻心（果子狸）是 SARS 病毒的中間宿主的看法。其論點：由果子狸、等粘膜體腔內細胞的 DNA 上分離檢視出近似 SARS 病毒的基因序列。實際上如果依上述多數學家所認同的假說來推論、應該說果子狸、等身上的 SARS 病毒乃是經由人類排泄物的感染而來似乎更正確。

冠狀病毒在 1937 年由雞身上分離成功。我們知道 Influenza 大約 50% 由冠狀病毒引起的、而冠狀病毒的自然宿主、目前知道的就有豚、牛、貓、狗與鳥類等。1918 年西班牙的 flu (Influenza) 造成 2 千萬 ~ 4 千萬人的死亡。其謎底迄今尚未明朗。1957 、1968 年香港 flu 也

分別造成 7 万人與 70 万人的死亡。最近 1997 年發生的香港禽流感、3 天內就處分了 120 萬支鷄衣及 40 萬羽其他家禽。病毒學專家 Robert Webster（美籍）及 Kennedy Shortridge（澳洲籍）斷定肇事者是 H5N1（屬於 RNA 病毒）。本來此類病毒僅能在鳥類身上出現、由人畜朝夕相處、H5N1 病毒經由感染媒介物進入中間宿主豬隻體內，而人類 flu 病毒也藉由排泄物等感染媒介進入豬隻體內演變孕育出新株的病毒，再轉進人類體內，與生理組織相容，造成足以致命的 flu。（病毒會先進入一宿主，再輾轉進入人類體內，這是上述二位病毒專家在 1997 年提出的假說。）

1967 年德國 Marburg（馬爾堡）地區，一家疫苗製造廠，由烏干達引進的猴子身上“跳出來”一種 filovirus（線狀病毒），藉由宿主的體液、排泄物等媒介物，轉進人類體內，破壞眼球、睪丸等臟器，使組織溶解，被命名為馬爾堡病毒，在 WHO、美國 CDC 傳染性病毒分類上被列為 Level four。

1976 年 7 月，一名蘇丹生意人染上某種病毒而死亡，症狀類似 Marburg 病毒。接著員工們也跟著發病，瞬即整個村落蔓延開來，當地只有一家醫院，每天只有 5 支注射針管，實不足以應付上百名病患的須求，當局只有封村的手段，不准進出，等待瘟疫停止了，村民也死得差不多了，（病毒缺乏宿主），但是 2 個月後，在上述疫區以西 800 公里薩伊境內 Ebola River 附近一家醫院“Yambuku”（比列時籍修女管理），

再度出現類似病毒，這一前一後疫情，經專家學者檢証基因序列，發現証實乃為表兄弟品種，症狀較嚴重的就被命名為“薩伊 Ebola”，較輕微的稱“蘇丹 Ebola”，沈寂了近 28 年，在 1995 年，薩伊 kikwit 再度逞兇，短短的 3 月內造成 244 人死亡。

1951 ~ 1954 年韓戰時，曾導致 2500 名軍人發病、121 名死亡病例的漢他病毒，相隔 40 年後，它的分株 Sin Nombre，再度在 New Mexico 發飆。

由上述史跡記錄，我們相信，病毒不是那麼容易終結的，它不斷的進化蛻變，也不停息的利用生物資源，視機侵噬人類，類似新興病毒，將源々不斷的在人類身上生息。

對病毒，實際上並無所謂解藥，只有仰賴疫苗，正體尚未明朗的 SARS 病毒，疫苗的問世將遙不可期，目前全球只有 4 家疫苗製造廠，製造成本更是天文數字。因此隔離病患、提高個人的免疫力、注重個人與群體的衛生，乃是最有效的治療方法。

談 SARS 病毒、不談 Dr . Urbani，就如同談宗教古典、不提巴哈一樣，是非常失禮的。

Dr . Carlo . Urbani 是第一位向全世界發出 SARS 警訊的傳染病學家，也是第一位為了拯救世人而獻身的傑出醫師。因此有人建議將 SARS 定名為“Urbani Syndrome”，WHO 第 5 屆幹事長 Dr . Brundt Land 在追悼文中指出：

「 Carlo . Urbani 之死，使我們 WHO 的工作人員都深感悲痛，他的一生再度提示我們公共衛生與真理所在，今天我們大家都應該停下來沈思，來追念這位先驅者 」

Urbani 出生於義大利小城 Castelplanio 、 畢業於 Ancona 大學醫學院，從事瘧疾與寄生蟲病學的研究，與夫人（ Giuliani Chiorrini ）育有 3 兒女，喜愛巴哈的音樂及飆摩托車。本行是流行於越南湄公河一帶的血吸蟲、寮國高棉的線蟲病、以及馬爾地區的鈎蟲病，是 WHO 西太平洋區的感染科主任。曾擔任無國界醫療團主任， 1999 年因此而獲頒 Nobel prize （ 平和賞 ），他的醫學哲學觀點是 “ 醫師的任務就是要儘量去接近病人 ” 。

2003 年 2 月 26 日，台裔美籍商人 Johnny CHEN 發病，住進河內法國醫院，發燒、乾咳、肺炎等症狀，院內醫師不太能確定病因，認為是亞州的 “ 鳥感 ” （ Bird flu . ）， Dr . Urbani 對於麻煩病例的診斷，有独到的工夫，因此 WHO 的同仁便招呼其參與會診，一接觸到陳姓病患，便意識到這不是一般的 flu 、 而是相當嚴重的傳染病毒病例，因此瞬即隔離病患，並警告越南衛生當局，須全面預防。

3 月 9 日， Dr . Urbani 與 WHO 派駐越南的主任醫師 Pascale Brudon 與越南官方會談 3 ~ 4 小時，決定關閉河內法國醫院（ 3 月 11 日關閉 ）、病人全部隔離、過境旅客全面檢查、管控各大醫院等預防措施， 2 週內快速果斷的決定行動，使越南避開了

全面性的，因此 WHO 也得以早期（3 月 12 日）向全世界發出 SARS 警訊。

3 月 11 日 Urbani 到曼谷參加一項寄生蟲會議時，已出現 fever，身體狀態非常不良，美國 CDC 的醫師 Scott . Dowell（SARS 期間曾去台協助）午夜頃在機場護送 Urbani 上醫院時，片刻彼此凝視間，都已意識到這將是永別了。在醫院內最後清醒的片刻，Dr . Urbani 要求牧師為他禱告，也告訴他太太，這裡將是他的終點，希望把孩子帶回故鄉，同時願意把肺捐出來作研究，3 月 29 日（日）午前 11 時 45 分，慧星殞落了，享年 46 才。

言猶在耳

“ 醫師的任務就是要儘量去接觸病人 ”

以此來作結語。

「海外僑界醫藥衛生專業人士回國參訪團」記行 大
山 青峰

當飛機漸漸下降時、心中湧起了異樣的感覺、畢竟這是有生以來第一次參加這種團、也是第一次搭乘 China Airline ！

八月的台北、比想像中還熱、水泥所砌出來的叢林更添加了溽暑的反射、老台北的我、實在很難接受台北比高雄熱的事實。

團員 36 名、讓人驚訝的是那群 30 歲左右、年青醫師的台語和中國語、其造詣之深甚至黃色幽默黑色笑話都可以來！再一次體會到 from TAIWAN 的決心與毅力。

想到 SARS 、說到 SARS 、經過了那幾個月的事、許多人現在都還會不禁熱淚滿 ；有多少令人傷心、令人感動的故事、在那裡在那時、不斷的重複演出。

來自瑞士的一位醫師建議 SARS 受害人家屬可以控告 WHO“ 健康上的歧視台灣”、不無勝算至少可以替台灣宣傳（ make a noise ? ）

白樂崎（前 AIT 主席）前日在李登輝學校發表專題演講時、對台灣參與國際社會的困境提出警訊、他認為美國將越來越難協助台灣參與國際組織、因為越來越少的國際盟友願意協助美國幫助台灣、同時更多的國家着眼於中國的商業利益、這是台灣必須注意的情況。

當然關於加入 WHO 、也是這個事實的反應、陳總統就任以來成立跨部會工作小組、加上 NGO 的台灣醫界聯盟基金會（即去年來日對我們演講的林世佳小姐）和很多人共同努力之下、是有一定的成果、但只能說再努力！再加油！

值得一提的是七年前成立的国家衛生研究院（美國的 NIH 台灣版）、那裡聚集了一群醫藥衛生界的專家、專門在解決現階段醫療上的問題。是一個務實的新機構。

外雙溪的故宮博物院、展出內容可算得上 magnificent 加上專業化的導遊、心情上類似去倫敦的大英博物館或是巴黎的羅浮宮。

倒是八里的十三行博物館（ museum of archaeology ）是今年四月才完成的。那裡陳列著新石器時代台灣人的生活形態。走著看著、心中迴想起無數的共鳴——終於我知道了、這就是我割捨不去的一部分了。

淡江的落日、猶如陳澄波先生所畫的；特別是從佇立在老街山坡上的紅樓、遠眺河口、古色蒼然中——夕陽紅、真是不知今夕是何夕。

不曉得是不是加齡的關係、這次好像比以前更容易落淚。尤其是看到 直的笑臉——那不是多少夢中所難忘的 ？望著這塊有如母親般的土地、不禁想到底可以給 什麼 ？緬懷先祖留下的遺產時、忍不住 喃——台灣將有什麼樣的明天？

“ 儘心儘力 ”

古森義久氏講演録

本稿は平成15年8月10日にホテルニューオータニで行われた「日本台湾医師連合特別講演会」（主催・日本台湾医師連合）における、古森義久・産経新聞論説委員の講演録です。（文責・日本台湾医師連合）

「アメリカから見た台湾・中国・日本」

1、50歳代にしての台湾での驚き

私は日本人として、今日のように何かほのぼのとしてくるような暖かい心を、ストレートに感じるがあります。

台湾の方が日本で、一種のアソシエーション連盟を作って色々活動されていることは存じ上げていましたが、お医者さんだけがひとつの組織を作られていたことは今回まで知りませんでした。そこでみなさんの趣旨書を読みましたが、そこで驚いたり感動したりした訳です。

たとえば「台湾が国際社会に置かれている不当な地位を考える時、その状態が台湾人の心を深く傷つけているばかりでなく、日本の国益はもとより、世界の平和と安定をも損なっている」と書かれている。「台湾人として苦難の歴史の一部を背負ってきた我々台湾系日本人」という言葉もありますが、そういう人達が立ち上がったということに、私は個人としての共鳴を覚えるのです。

そこで今日はまず「台湾と私」ということをお話したいと思います。ただ今話したような個人的な、ほのぼのとしたもの、胸を打つ熱い想いというものだけでは語れない、冷徹で冷酷な国際情勢というものもある訳でして、その辺も後半でじっくり話したいと思っています。

さて「台湾と私」ということについてですが、私自身がしているマスコミ、新聞の仕事というものは、いろいろな物事を見なければいけないし、知らなければいけないのですが、実は台湾のことについてまったく無知だった時代がある訳なのです。

私が最初に台湾の方たちと接触したのは1960年代です。当時台湾については、台湾支持の自民党の政治家が行く位で、日本には風の便りも伝わってきませんでした。

私は日本の大学を出てすぐ、アメリカ西海岸のワシントン大学へ行きましたが、そこには台湾の人もずいぶん来ていたんです。そのなかで、ある人達は友好的でよく話しかけて来たのですが、ある人達は冷たい感じがして、それが不思議でなりません。そうしたなか、ある女性と仲良くなったのですが、ある程度親密になったところで「日本人と中国人は親密になってはいけないだって」と言われ、胸にこたえた覚えがあります。「台湾の人は日本人に近寄らない方が良いのかな」と思い、これで若き日の台湾物語が終わったのですが、その頃はまだ、台湾に1949年に大陸から来た人と、それまでずっと台湾にいた人という、二つの異質な背景を持つ人々の区別など、恥ずかしながら知らなかったのです。

それ以来台湾の人間だけでなく、台湾というコンセプト自体との接触がまったくなくなりました。それから何十年も経ち、なぜまた台湾と関わりを持つよ

うになったかと言うと、1997年7月に香港の返還がありまして、ワシントンにいた私は1ヵ月ほど取材に行きました。そこで初めていわゆる中華圏というものに接触し、いろいろな話を聞いたのですが、話が「日本」に及ぶと、必ずぶつかることがあるんです。つまり歴史の問題など、どうしても越えることのできない部分です。そしてそこで感じたのが、日本で聞く「日中友好」というものには限界があるということでした。帰国後、その時の見聞を産経新聞に書き、そしてそれとは別に「日中友好という幻想」という論文をある雑誌に書きました。「日中友好と言うが、友好とは幻、錯覚ではないか」と。そうしたらワシントンにいる私のところへ、「ちょっと台湾に来ないか」という話が、ある人を通じて来たんです。李登輝総統からでした。びっくりしました。しかし現職の総統ですから、当然インタビューに行きました。その時は何の知識もなく、李登輝総統が日本語を喋ることすら知らなかったんです。まして私よりうまい日本語を話すなど。まあ、びっくり仰天です。少なくとも一国の政府の元首が、これほど日本語を喋るなんて。台湾ではそういうことがあるのか、ということ、50代にして初めて知ったんです。

李登輝さんが日本語を喋ったからと言って、「やはり台湾は全部親日本である」という単純な考え方ではいけないことはよく知っていますが、だけどびっくりした。

2、砂漠とオアシスほど違う北京と台北

当時は97年12月ですから、総統に就任してちょうど10周年に近い時です。インタビューで彼は、その10年間の回顧をはじめました。彼はお話が非常に上手だし、話好きですから、黙って聞いていると面白い話が次々と出てくる。ところがこのためにどの位の時間を当ててくれているのかわかりません。まあ国家元首というものはだいたい1時間だろうと。ところが「日本の政治家がこう来たから、こう言ってやった」とか「金丸信からこう言われたから、こう言い返してやった」などと聞いているうちに、45分が過ぎてしまったんです。時間はあと15分位しかないのに、まだ8年前のことを喋っている。これでは記事にならないから、残りの時間ではぜひとも8年を飛ばして、今のところへ来てもらわないと困る。それで「ところで最近の情勢なんですけども」と言ったんですが「いやあ、順番で行くから。まあ時間はたっぷりあるから」と言うんですね。それでは、と諦めて、彼のペースに任せていたら何と4時間です。ちゃんと10年目の話も聞き、記事を書くことができました。

それ以来、時々呼ばれましたが、ご夫婦で日本語を喋っているんですね。

李登輝さんが日本に倉敷の病院に行かれた時の話ですが、診察を終えて車に乗り込もうとする瞬間の写真を、地元の中国新聞が撮ったんです。その写真を見ると、李登輝夫人が車のドアの所に立って、群衆を見ながら夫を中に入れようとしているんです。夫人は小柄でやさしい感じの方ですが、その時は夫を守ろうという毅然とした感じがありまして、それが写真にバーツと出ているんですね。

そこでその直後にご夫妻とお会いしまして、私が「奥様、すごく良い表情で

すね」と言いましたら、夫人は「嘘でもそう言われると嬉しいわ」と言ったんです。そうしたら李登輝さんが突然「ふみさん。その日本語表現は使ってはいけないと言ったでしょう」と言うんです。つまり「嘘だとしても嬉しい」というのは、少しとげのある表現だということなんです。

ぼくはその時、それほどまでに日本語を大切にしているのかと。戦争前や戦争中、日本は日本列島以外では嫌われてきた、日本がすべて悪かったという教育を受けて育ってきた人間としては、びっくり仰天を通り越した、まさに感動的な場面だった訳です。

北京に98年から2年間位いたんですが その間にも台湾に行く機会がありました。ある雑誌にも書きましたが、北京から台北へ行くということは、普通の日本人にとっては砂漠からオアシスに行くという感じがするんです。これはけっして誇張ではありませんし、北京の空気が乾いているからという訳でもない。とにかく台湾には暖かさがある。

台北の空港に着いた時、後の中年女性が荷物のカートを私の足でぶつけたんですが、その人は少しアクセントのある日本語で「すみません、すみません」と言うのです。北京ではこのようなことはないですよ。ぶつかっても「すみません」などと言わない。まして日本語で言うなんて考えられないことです。

3、台湾はイスラエルになれるか

台湾と中国とでは一つ一つの違いがとても大きい。陳水扁總統が選挙に当選した頃、北京でNHKやCNNで台湾の模様を見ていましたが、選挙の前日に、陳水扁が雨の中でマイクを持って演説をしまして、そこに群衆が集まってくるんです。このような光景を北京で見ていると、「一つの中国と言うけれど、これほど体制に違いがあるのか」と。これは中国ではまったく考えられないことなんです。こうしたことは、中国問題を考える上で重要な要素だなと感じたんです。

そこで「アメリカから見た台湾、中国、日本」という今日のテーマですが、これから台湾がどういう道を歩んで行けるのか、あるいは行くべきか、ということについては、我々も日本の国益の立場から考えるし、世界情勢の中でも考えるし アメリカにとってどうなのかも考える訳です。

特にアメリカから見た台湾はどのようなものか。台湾の独立と言う言葉でもいいですし、李登輝さんの言われた自立とか、「一つの中国から外れて行く」、あるいは「特殊な国と国との関係」という言葉でも良いんですが、アメリカでそのようなことを考えられる方に、私はいくつかの質問をするんです。よくする質問は「アメリカから見て台湾は、イスラエルになれるか」ということです。

これには少なくとも三つの意味があります。第一は、台湾に武力行使をする大国があった時、台湾はイスラエルのように、何が何でも戦う姿勢があるのかどうか。

第二は民主主義です。いろいろ問題もありますが、アラブ中東の全域で、イスラエルだけに、国民が自由に政権を選ぶ民主主義が定着している。台湾も民

主主義を追求して行けるのかどうか。

第三は、第一と第二を合わせた上で、イスラエルのように、アメリカにとって死活的な重要性を持ち得るのかどうかです。

中国の将来、台湾の将来、日本の将来は、アメリカの存在なしには考えられないのが現実ですから。アメリカにとってそれぞれの国、それぞれの地域がどういう意味をもつかが一番重要な点です。

97年12月に初めて台湾に行き、政府の安全保障担当で対日関係に携わる20～30人の方と集まって話をした時にも、私は「台湾はイスラエルになれるでしょうか」と聞いてみました。そうしたらピタッと意見が二つに分かれ、「台湾人は、いざとなったら逃げだして、中国本土と一緒にやってくたろう」とか、「いや、アメリカに行くよ。アメリカ国籍を持っている人は大勢いる」と言った人が半分位いました。あとの半分は「いやそんなことはない。戦うはずだ」と。「戦う」と言った人たちが、世代的には若手だったのが印象に残っています。

今申し上げたことがアメリカの一般の国民、あるいは政策を担当している政府高官、さらには学者、議員といった人達が、台湾問題を考える上での大きな要素として必ずある訳です。つまり台湾の人達自身は、いざとなったらどのように身を処すか、ということですね。

ただこれには最近、はっきり言って非常に大きな懸念がある。台湾人は中国にどんどん投資して行って、50万人がすでに中国にいます。現地で結婚する人も多くなっている。このように台湾の経済は、中国と親密になって経済の絆を保たなければやって行けない状態がでている。このままでは台湾は溶けてしまい、そのまま中国に吸い込まれてしまうという危険がある。アメリカでも、そう心配する人は多い訳です。

では今のブッシュ政権の台湾政策はどのようなのか。今この瞬間だけを見ると、「台湾は独自のアイデンティティを保つべきだ」と思っている人達、あるいは「独立を試行して行くべきだ」と考える人達にとっては、過去50年の歴代政権の中では、今が一番良いのではないかという気がします。

ただこの「一番良い状況」というものは、いつかは崩れ得るんですね。やはり世論というもので動いて行く国ですから。そこが民主主義の良いところであり、危険なところなんです。

そういう前提を強調したうえで、では何か一番良いのかということをご説明したいと思います。

4、ブッシュ政権下で活発化する対台湾交流

2001年にブッシュ政権が登場し、内政、外交の面でクリントン政権とは違う政策をいろいろと打ち出しました。その中で上から数えて3つ位の内の一番大きな政策の転換が、おそらく台湾も含めての対中国政策です。もちろんそれは対日本政策とも絡んでくる問題です。

クリントン政権の場合は中国を重く見る、友好的に見る、あるいは暖かく見るという感じが強かったですね。だから中国を戦略的パートナーとまで言って

いた。従来のアメリカでは、これは同盟国に対してしか使わなかった言葉なのです。

逆にブッシュ政権は、相手の国が民主主義かどうかということ、ヒステリックな位に気にします。それ次第でその国との関係を左右させてしまうんです。

それからクリントン政権には戦略的曖昧さというものもありました。中国がもし台湾を武力で攻撃しそうな時に、アメリカはどう対応するのか。何か何でも台湾を守るのか、それとも何もしないで放置しておくのか。これについては、どっちとも言わず、曖昧にしておくんです。そうすることで「ひょっとしたら攻撃してくるかも知れない」と中国に思わせて、抑止力にするという戦略です。ところがブッシュ大統領はこれを即座に破棄したんですね、

アメリカでは、政権が民主党から共和党に変わり、あるいは共和党から民主党に変わると、何か何でも前の政権とは反対のことをやるという傾向もありますから、それを割り引いて考えなくてはなりません。それでもブッシュ政権は台湾を重く見ている。中国尊重の政策を改めるという姿勢を、非常に明確に打ち出している。

ブッシュ大統領は「台湾がもし攻撃されるような場合には、台湾の防衛に必要なことは何でもすると」とまで言ったんです。後で「これはちょっと言いすぎた」ということで、ライス大統領補佐官が訂正していますが、いずれにせよ、戦略的曖昧さでなくて、「まずアメリカが出て来て中国を抑えるぞ」ということをはっきりさせています。

それからもう一つは、それと表裏一体ですが、台湾に近代兵器を送るということです。クリントン政権は売ることをしなかったキッド級駆逐艦とか、対潜哨戒機、ディーゼルの潜水艦というものを売ったんですね。政権誕生からわずか3カ月でそれを決めている。

こうしたことで台湾との交流がものすごく活発になりました。私達もよく記者会見に呼ばれるんですが、ワシントンを訪れる台湾の国会議員や学者の人達が、最近とても多いんです。それも民進党主体の人達が。重要かどうかは知りませんが、彼らにはまず英語がうまい人が多いですね。若い女性で、よく陳水扁総統の英語の通訳をやっていたウィツキー・シャオさんですが、彼女は通訳兼政府のまとめ役なんです。ただ英語だけではなく、政策的なことを聞かれても、すぐ答えられるんですね。

最近印象に残っているのは、昨年9月に陳水扁総統の呉淑珍夫人が車椅子でやって来て、ワシントン市内のアメリカン・エンタープライズ・インステテュートという研究所で講演をしたことです。これには沢山の人が集まりましたが、演説が立派なんです。そこへブッシュ政権の閣僚が来るんです。ボルトンという国務次官で、よく台湾ともかつて交流していた人物ですが、呉夫人とは本当に手を取り合って交流していることが解ります。呉夫人は「アメリカと台湾の両国は（国という言葉をちゃんと使いました）、民主主義、自由を共有するその最善のパートナーだ」とスピーチし、結構アメリカのマスコミにも大きく取り上げられていました。

それからワシントンにはツインオークスという大きく立派な邸宅があります。

これは国民党時代からの台湾政府の持ち物のようですが、そこでよくパーティーなどあり、私も程建人駐米代表に呼ばれたりしますが、そこでは単なる友好交流だけでなく、もっと実質のある交流が非常に活発に行われています。例えば台湾の国防大臣にあたる湯耀明国防部長が去年3月にここに来て、ウォルフォウィッツ国防副長官と会談しています。私は随分前から台湾、中国、アメリカとの関係を見て来ましたが、No2とは言え、アメリカの国防の責任者と台湾の国務大臣が堂々と会談をするなど、以前では考えられないことなんです。

5、「台湾は国を守る気があるのか」という懸念

もっと考えられない事は、中国が激しい抗議をしなくなったことです。この時、たまたま主席になる前の胡錦濤氏が、この台湾国防部長のすぐあとにアメリカに来ることになっていまして、今までの中国のパターンなら、そこで抗議して「胡錦濤の訪米は中止だ」などと言うんですが、この時は全然言わなかった。

このように台湾は、これまでできなかったことを、今では平然とやっているという感じがします。ブッシュ政権もそういうことを奨励しているし、受け入れている。だから日本と違って、ブッシュ政権の閣僚クラスが台湾を訪問するなんてことはしょっちゅうある。国務長官は行かないですが、商務長官あたりは平然と台湾を訪問しています。

ただ先程申し上げたように、台湾の経済がどんどん大陸に依存して行くと、アメリカでも「もう台湾には自立も独立もないようだから、まあ中国と一緒にしても良いのではないか」「今香港で破綻をきたしている『一国二制度』でも良いのではないか」という意見が出てきます。皆さんは「とんでもないことを言う」と思われるでしょうが、その様な印象がアメリカ側に、ビシビシと伝わっている訳です。だからブッシュ政権が台湾に一生懸命テコ入れしても、肝心の台湾の人の多数派が「いやいや、もう大陸と対決する必要はないのだ」という風になってしまったら困るな、ということが、アメリカでヒソヒソと囁かれている状態なのです。

そういう懸念が出てきた根拠の一つが、先程申し上げたアメリカから台湾への2001年の兵器売却での台湾の対応です。

台湾政府はディーゼル潜水艦をまだ注文していません。なぜならアメリカ国内ではディーゼル潜水艦というものをほとんど作ってない。ドイツなどのヨーロッパの国に頼むと、中国が必ず圧力をかけて、注文し難い。しかも今、台湾政府は非常に緊縮予算です。私はこの潜水艦の購入が決まった前後にちょうど台湾にいて、李登輝さんに話を聞く機会がありました。彼は「ハツソウ来るんだ」と言うんですね。「ハツソウ」とは何だと思ったら潜水艦「八艘」の事で、「ハツソウ来れば大丈夫だ」と喜ばれていたのですが、しかし実際に買うとなったら、政府に予算措置がとられていない。

2年以上過ぎた現在でもそうですから、「台湾は本気で国を守る気があるのか」という人達もアメリカにはいる訳です。

今まで申し上げてきた、堅実で前向きな台湾とアメリカの関係に一種の影と

いうか、不吉な穴のようなものが出てきているのではないかと思います。

6、対テロ戦争中でも変わらないアメリカの対中国認識

御存じのように、中国は台湾への武力行使の条件を3つはっきりさせています。

第一は、台湾が独立を宣言した場合。第二は台湾が外国勢力に占領された場合。第三が、これはいろいろな解釈ができて一番微妙ですが、台湾側が統一交渉を無期限に拒んだ場合です。この「無期限」とはどういうものか。これは皆が北京でよく質問する問題ですが、中国側ははっきり答えない。「まあ数年」だとか、「十年以上」という言い方をよくします。だからいつになったら中国にとっては許容できない状態になるのがわからない。ワシントンで私がよく話す中国側の人などは「あれは放っておいて良い。経済のきずなの拡大に任せておけば大丈夫だ」と平然と言う人もいますし、「その内台湾は中国になびいてくるよ」とハッキリ言う人もいます。

それから「台湾の独立」ですが、これについてブッシュ政権がどのように見ているかです。よく「独立を支持しない」という言い方をしたり、たまに「独立宣言には反対する」という表現が出たりしますが、突き詰めて聞いて行くと、この「独立を支持しない」は「独立に反対する」という表現よりは弱いですね。そうすると「この辺に本音や建前がいろいろあるのでは」という読み方も出てくる訳ですが、私はやはり「独立宣言には反対」というのが本音ではないかと思っています。実際、台湾には独立国としての要件を満たしている部分が随分あるのだから、今さら独立宣言で中国の武力行使を招くようなことは是非とも止めてくれというのが、ブッシュ政権の本音です。

ただし、これも民主主義の面白い所で、ブッシュ政権を支えている共和党の議員や学者などは「台湾は公式に独立を宣言してもよいのだ、むしろすべきだ」と言う人はいます。台湾が民主主義、自由市場経済という基本的な価値観をアメリカと共有する以上「一党独裁で人権を弾圧している中華人民共和国から完全に離れると宣言しても良い」と言う人も、少数派ながらいるんです。アメリカ人の心情としては、やはりそういうものがあるんですね。

ではその中国に対して、ブッシュ政権はどのような態度をとっているのか。

アメリカの対テロ戦争で、イラクでは大量破壊兵器が見付からないとか、見付きそうだとか、いろいろ言っていますが、この大量破壊兵器、それから核兵器、化学兵器、細菌兵器がブッシュ政権にとって、あるいは我々全世界の普通の人間にとっても、これが非常に大きな懸念材料になっていることは間違いありません。

そこでブッシュ政権は、テロや大量破壊兵器という目の前にある脅威への対応を最優先するため、中国に対する姿勢を、ある意味で非常にソフトに変えてきていることは事実です。クリントン政権のような融和や和解の姿勢に変わってきたとの見方もかなり出されています。

ただ客観的に現実を眺めると、私自身は違った見方をとらざるをえません。やはりアメリカにとって中国の存在は、自分の利益と正面からぶつかる脅威で

あり、潜在的なチャレンジャー、ライバルであるという認識、しかも長期的に見れば、アメリカにとっては最大の潜在的な敵（表だって「敵」という言い方はしませんが）とする認識は変わってないのです。

日本でもベストセラーになった『ブッシュの戦争』を見てもわかりますが、ブッシュ政権誕生の時、側近たちは外交問題における一番の懸念として中国を捉えている。中国を潜在の敵、ポテンシャルエネミーとして位置づけている。そうした認識は、9・11のテロ後も決してなくなった訳ではないのです。

中国が、アメリカの東アジアでの政策そのものに挑戦してきている国であることは間違いありません。実際、日米安保にも本音では反対です。アメリカ軍が東アジアに駐留する、韓国に駐留する、日本に駐留するということに反対だし、台湾に対して「守りますよ」というコミットメントを持っていることにも反対。要するに、東アジアからアメリカ軍が出て行ってくれることが好ましいと言ってきている国なのです。

それからアメリカには、やはり民主主義ではない国とは本格的な友好関係は築けないという、恐らく子供っぽく映る程の外交のこだわりもあります。これはアメリカの建国の理念にまで遡る様な、深い深いコンセンサスです。

もちろんアメリカにも「自分達の利益だけはまず守る」という考えがありますから、人権、民主主義、自由といった問題でも、一時妥協することはある。例えばチベットを中国が不当に抑圧しても、ブッシュ大統領が胡錦濤主席にチベット問題をガンガン提起することはありません。それでもやはり民主主義というものを基準にして外交政策を組み立てるという基盤は、アメリカには厳然としてある。その観点から見たら、中国はやはり相容れないという部分がある。

7、アメリカが気にする中国のミサイル配備

一方、中国ですが、今までさかんにアメリカを批判していますね。「一極世界」という言い方をして。これは「アメリカだけを超大国とする、今の世界の仕組みを打破しなくてはいけない」「多極世界にしなければならない」と言うものです。多極となれば恐らく4つか5つの極に分かれるでしょうが、もちろん中国もその一つに入っている訳です。「では、日本は入っているのか」と中国の指導者に聞くと、あまり答えは返って来ません。恐らく入っていないでしょう。総合的国力というものがありますから。

総合的国力に関して言えば、中国には、2025年頃に中国がアメリカを上回るとのプロジェクトの予測があります。つまりアメリカ衰退論です。これは日本にもついこの間まであったんですが、今はありません、しかし中国はアメリカ衰退論というものを、かなり頻繁に打ち出してきました。つまり中国側も基本的にはアメリカを敵視しているんです。

もちろん経済の面では、台湾と中国との関係と同様、アメリカ企業が中国に投資をして、そこで安いものを作り、それをまたアメリカに輸出して、それでお互いが儲かったら良いではないか、という現実的な絆はあります。

ただ台湾や日本と決定的に違うのは、基本的権利が認められていない中国の安い労働者を、アメリカ企業が使うのは怪しからんと意見が米側の一部にあ

ることです。アメリカの議会では労働組合の代表がいつも出てきて、非常に強い意見を言っています。これは日本の労働組合には全然ない発想です。中国の労働者には保険も医療費もなく、ILOで認められている基本的権利、たとえば労働組合の結成の権利、あるいは雇用側との団体交渉権などは認められていません。そのような状況で労働者を酷使していいのか、という疑問がアメリカ側で提起されるわけです。

アメリカと中国の経済の絆は太くなっているにもかかわらず、その一方で先程申し上げたように、アメリカの中国への警戒心は非常に強い。その端的かつ具体的な事例としては、国防総省が年に1回、必ず中国の軍事力の状況を発表するという規則があります。つい2週間か10日位前にも、今年のレポートが出ました。非常に詳しい報告書で、既に日本の新聞でも報道されていますが、今年も去年と同様、一番大きな項目として挙げているのが、台湾向けと思われる中国の短距離ミサイルの配備についてです。福建省、南京などに短距離の弾道ミサイルが450基ぐらい配備されており、しかも年間75基位のペースで着実に増えていると。

アメリカはブッシュ政権以前から、これを非常に気にしているんです。私はその頃北京にいましたが、ブッシュ政権、ブッシュ陣営の要人が時々メッセージを持ってきて、中国側に「台湾海峡付近ではミサイル配備を止めてくれ」「もう既に配備されたものは撤去しなくて良いから、新しいものを増やすのを止めてくれ」という要望を伝えていました。

現在台湾に駐在しているアメリカの政府代表のダグラス・パール氏も、そういうメッセージを届けたことがあるそうです。その時は「もし台湾に照準に合わせたミサイルを減らさなくてもよいから、単に増やさなければ、アメリカは台湾に新しい兵器の売却を延期しても良い」とまで伝えていたんです。これはジョージ・ブッシュが大統領になると決まったあとの、2000年12月の終わりか2001年1月の初め頃のことです。

しかし中国側は、それを一切聞かなかった。そしてそれまで通りに1カ月に2、3基位のペースで新しいミサイルを増強している。更にロシアから、あるいはウクライナやグルジアから、中国にとっての新型兵器をいろいろ買っています。これはもう古い話ですが、スホイ27という戦闘機などですね。最近ではスホイ30なども買っている。それからキロ級潜水艦とか、ソブレンヌイというミサイル駆逐艦ですね。スホイ27の方は中国はすでにライセンス生産をしています。弾道ミサイルとは別に巡航ミサイルもあります。自動操縦みたいに飛んで行く巡航ミサイル。これもかなり増やしているのです。

ですから間違いなく、中国人民解放軍の当面の最大目標として、台湾軍事侵攻のシナリオが存在するわけです。そのシナリオに沿って軍備増強をしているのです。もちろんすぐに戦争を始める訳ではありませんが、いざという時には、そうできるようにしなければならない。準備を整えておく必要があるのです。

そこで、陳水扁政権ですが、アメリカ側には「第2期陳水扁政権はまずあるだろう」という見通しもありました。中国側もそうみていました。私自身もぜひそうであって欲しいですけども。しかしこの見通しは今は非常に分から

なくなりました。

それでも中国は万が一に備えて、「陳水扁政権は第2期目になった時が一番危険だ」という見方をとっています。「陳水扁は第1期は慎重にやっていますが、もし再選されたら本音を出して、ある日、突然、独立を宣言するのではないかと、中国高官がもらすのを聞いたことがあります。

そういう場合には、中国はこれまで一貫して「軍事攻撃をする」と宣言してきたわけです。なのに、実際に軍事攻撃をかけられる態勢がなかったら、これほどお恥ずかしい話はない。「だから今から態勢を整えておくんだ」と平然と語る人たちが、中国の高官のなかにはいるのです。

だからアメリカが見るのは、まさにそのような中国側の、軍事攻撃も辞さず、という考え方、行動様式ということなのです。

8、アメリカに勝てない中国の融和、和解姿勢

アメリカの国益としては、台湾海峡を含む東アジアに関しては、現状維持が一番良いことは明白です。だからその現状を引っくり返そうとするパワーに対しては、アメリカは正面から立ち向かわなくてはならないという構えもあります。このアメリカの現状維持に対して、中国は現状打破が狙いです。だからこそアメリカにとっては中国はやはり潜在的な敵としてみることになるのです。

それに対して中国は近年、非常に面白い変化をして来まして、先ほど申し上げたように、アメリカとの対決、対立、衝突をできるだけ避けるようになってきたんです。

たとえば我々はいつも中国に、「日米安保には賛成ですか、反対ですか」と質問するのですが、私が北京にいた頃はだいたい「反対」という回答です。ところがそれが最近変わってきた。2001年に当時の唐家セン外相がパウエル国務長官に、「アメリカ軍が東アジアにいても、在日米軍がいても良いんだ」ということを言いはじめた。2002年10月の上海でのAPECでも、江沢民はブッシュに「アメリカの東アジアにおける軍事プレゼンスは、東アジアの安定に役立つ」などと、今までとは全然違う話をしている。

こうした中国側の発言をアメリカは信用していません。中国の本音などではなく、アメリカと衝突したくないがための中国の戦術だと思っている訳です。

中国側が表面的に姿勢を和らげてきた最大の理由は、湾岸戦争、コソボ、アフガニスタンなどで、アメリカの軍事パワーの強さを見たからでしょう。一気にクウェート侵攻軍を破り、空爆だけでユーゴスラビア連邦を屈服させてしまうという、地上戦闘なしで空からだけで戦争をやって、自分達の方はほとんど死者を出さないという、あの革命的な戦争の仕方に、「驚異だった」と、中国の人達は言っていますね。

アメリカ当局が一昨年、アフガニスタンのタリバンとか、アルカーイダに爆撃を始めた直後に中国側でおもしろい動きがありました。中国の人民解放軍には、相手の軍隊が何をやっているかを知るため、信号や無線の傍受と暗号の解読を行う特別な部隊があるそうです。そのなかで最精鋭の部隊は普段、だいたい台湾海峡に近いところにいますが、アフガニスタンでのアメリカ軍の爆撃が

始まったら、すぐに新疆へと動いたというのです。新疆とアフガンは繋がっていますので。このように中国は、やはりアメリカがどのような戦争をするか、固唾を呑んで、息を詰めて見ている訳です。そして「これではアメリカと事を構えたらまずい」という判断が明らかにそこでまた補強されたようです。

その判断の裏には、アメリカがブッシュ政権になって、中国向けの軍事力を強化していることもあります。グアム島に原子力潜水艦を新たに持つてくるとか、B1という爆撃機の数を増やすとかです。

このようなアメリカの、力で対立して行くという姿勢は、私が見ても恐ろしい位です。良く言えば毅然たる、悪く言えば冷酷にとでもいえまじょうか、とにかくすごい勢いで、平然と軍事力を使うというところがあるんですね。

話は戻りますが、アメリカの大統領選挙中「ブッシュ政権になったらこういう中国政策をやりますよ」ということを立案していたブッシュ陣営の人が、北京に来たので話をしました。当時人民解放軍の副参謀総長の熊光かい（木に皆）が非公式な場でにせよ「もし台湾海峡で有事になってアメリカ軍が出てきたら、ロサンゼルスにICBMでの攻撃を考える」などという趣旨を述べていたのです。熊将軍はその後、その発言をあわてて取り消したりもしましたが、当時のクリントン政権の内外には衝撃波を広げました。そのブッシュ陣営の人にこの件を述べて、反応を問うと、彼はせせら笑って「上海沖にはいつもアメリカの原子力潜水艦がいる」「北京でも上海でも、核ミサイルはほんの五分で届くのだ」と半分冗談みたいに言うんです。

上海沖にアメリカの原子力潜水艦がいることは間違いなく中国側も十分知っている訳です。だから「こちらはロサンゼルス、こちらは北京と上海」というようなことを言う。本当にそういう風になるかは私は知りませんが、少なくともアメリカ側にはそういう備えがあり、しかも実際にその核ミサイルを最悪の事態には発射する覚悟がある、ということその人物は冗談にひびくような口調で宣言していたのだといえます。真実はその言葉の半分しかなかったにしても、ブッシュ陣営の特質を象徴する、と感じました。そういう断固たる姿勢がブッシュ陣営にはある、そのようなメンタリテイがある、ということでしょう。

もちろんその種のアメリカの軍事戦略はクリントン政権時代にもあったと思います。ただしブッシュ陣営はそれをもっと強固かつ明確に表明するのです。中国側ではそう言う体質に触れて、びりりと電気を感じたような反応が指導部の今の言動から十分に窺われる。アメリカと軍事面で対等に戦えるかと言ったら、中国はまだまだそこまで行っていないし、ちょうどアメリカ側も対テロ戦争での協力を一生懸命求めてきているので「だったらこの際はアメリカを叩くような強い言い方を引っ込めて、少し融和、和解の姿勢で行こう」というのが今の中国の状態なのです。

ですから、ずっと申し上げてきた基本の「アメリカ・台湾・中国」という危険を孕んだ三角関係の基本構図は基本的には変わっていない。表面の穏やかそうに見える動きだけで、実際に全部がそうだ、と見るのは間違いだという訳です。

経済面に象徴される台湾と中国との結びつきの深まり、広まりにつれ、台湾

ではひょっとしたら 「とにかく中国と一緒にって行くほうが良いんだ」という意見が多くなってしまいかも知れませんが、それでもアメリカは「いざという時には台湾を支持する」という姿勢を崩してはいない状況があります。

9、日本が「普通の国」になることを認めているブッシュ政権

最後に日本ですが、ブッシュ政権が日本をどう見ているかについて簡単に言うと、これも歴代のアメリカの政権のなかで初めて、日本に「普通の国になってくれ」「普通の国になっても良いですよ」ということを言っているのがブッシュ政権です。

日本側では自衛隊をイラクに送っても「危ないところには行ってはいけない」「戦闘の起きるところには一切行ってはいけない」と言うくらい、おかしな話がまかり通っている。これは全て日本が自らに課した憲法と言う規制のためです。しかし何も危険のないところなら、自衛隊という一種の軍隊が行く必要もない訳です。

安全保障ということに関しては、普通の国は普通に軍事力を行使できるんですが、日本は集団的自衛権の行使、つまり仲間と一緒にって何かをするということができない。土井たか子さんのように、「憲法の解釈を変えて、集団的自衛権を認めると、日本は軍事大国になる」などと今でも言っている人がいる。日本が普通の国になることに日本の左翼が反対するのは、できるだけアメリカとの防衛関係を強くさせたくないからです。

中国や韓国も同じことを言います。「日本人には危険な体質があって、普通の国のように軍事力の行使を認めると、すぐに攻めてくる悪い性質がある」などと意味のことを言う。日本人のDNAへの不信ですね。これは冗談で笑っている分には良いけれども、まじめに考えると、これほど屈辱的な話はない訳です。日本というのは、普通の状態になると悪いことをする体質だなんて。成熟した民主主義の国である日本が、いったいどこを攻めて行くんですか。中国を攻める訳にもいきません。韓国を攻めても、そこはアメリカと同盟国関係にありますから、そうしたら今度はアメリカが日本を攻めてくることになる訳ですよ。

ところがアメリカの歴代の政府は、そのような中国や韓国の言う方にばかり耳を傾けてきたんです。そこでブッシュ政権になって初めて、日本が安全保障面などで普通の状態になることに対し「もし日本がそれを望むのだったら、アメリカは全く構いませんよ」となったんです。

ただ、日本が普通の国になったとしても、日米安保を破棄して、それこそ核兵器を自分で持つということになったら、やはりアメリカは困る訳ですから、それに対してはものすごい勢いで反対するでしょう。しかし今の日本の状況を見ると、そのようなことを求める政治的勢力はほとんどないですね。

だから「日本は普通の国になった方が良い」と思っている人間にとっては、ブッシュ政権は救世主みたいなどころがある。ところが不幸なことに「今、イラクを攻めて怪しからん」だとか、「ブッシュの英語は間違っておかしい。馬鹿だね」という話ばかりが広まってしまい、ブッシュ政権が日本との関係を

どう見ているか、どう望んでいるか、というところに中々話が行かない。これはもったいない気がします。

もしこれで来年の大統領選挙でブッシュが負けたりすると、これは台湾にとっても日本にとっても大変です。特に私は台湾にとっての方が大変だと思います。ブッシュ政権ほど台湾を守ろうとする政権は今後も生まれるだろうか。今の民主党の候補者を見ても、だいたいブッシュさんと反対のことを言っている人が多いんですね。

私は民主党嫌いで共和党鼻根、という訳では決してありませんが、日本にとって得か損か、東アジアにとって得か損か、ということだけを見れば、やはり民主党では少し不安です。ついこの間まで上院の民主党側で外交委員長をやっていたある上院議員の補佐官など、「台湾は中国と一緒になれば良いんだ」ということを平気で言っていました。

しかし日本にとっても台湾にとっても、今の状況は良い訳です。ただアメリカは民主主義の国で、振り子が激しく揺れますから、それを何とかうまく自分達の得になるように活用して行くことだと思っうんですね。

今の日本の場合には経済が弱いので、1980年代に日米関係で一番大きな問題だった経済摩擦というものがほとんどありません。それで相対的にますます安保が重要視され、うまく行っている。まあ、ブッシュ大統領と小泉純一郎首相は、個人としても非常に波長が合っている。これは間違いのない事実だと思います。

質 疑 応 答

(質 問)

アメリカでは、普通の人には台湾を中国の一部と思っているのではないですか。専門家でない方たちと話しているとそう強く感じます。それからもう一つ、キッシンジャーさんという方が昔いましたが、彼の外交政策は「道徳と外交を完全に分離するんだ」という考えだったと思うんです。ブッシュ大統領は道徳と外交がかなり一致していると思うんです。ライスさんはキッシンジャーさんの直弟子だということですが。

(古森さんの回答)

どの辺を「普通の人」と定義づけるかで違ってきます。議会のメンバーは普通の人とは言えませんが、普通の人を選んだ選良として考えれば、民主主義の台湾は中国とは全然違うんだという認識は、下院の435人、上院100人の間でもものすごく徹底しています。それから普通の人でも外交を見ている人たちの間でも、やはり台湾というのは「中国に呑み込まれそうだけれども、中国とは違う」という認識が定着しています。しかし「一つの中国」とはいったい何なのかについては、その辺まで詳しくわかっている人は少ないでしょう。

それからキッシンジャーの「道徳と外交を分ける」というのも、これもまた

程度の問題で、やはり道徳、道義、倫理なき外交というものを打ち出したら、アメリカの議会で非常に強い抵抗を受けます。道義、道徳を捨てざるをえない、あるいは捨てることによってはじめてアメリカの利益が守られるという場合は別ですが、道義を外交に織り込むというのがアメリカの伝統であり、一番大きな流れであるというのは変わらないと見ています。超大国としてのゆとりが出てくれば出てくるほど、道義ということを重視するという傾向があるようです。

(質問)

来年陳水扁総統が再選され、さらにブッシュ大統領も再選され、願わくは李登輝さんも健康でご活躍するという3つの前提条件が整って、2006年当時に台湾で住民投票をして過半数を取り、その結果台湾独自の一つの国として国家社会で認められる努力をするという、つまり台湾独立の宣言をした場合、世界は、アメリカはどのような反応をして、どのような状況になるのか。私は確かに中国は台湾に向けてのミサイルを配置し、「いざという時には」という構えをしてはおりますが、現実的にはやはりそういう力はないと思っています。私は、台湾はまともな国として、いろんな国の承認が得られるのではないかと、希望的な観測をしておりますが、一つ鋭い国際的な広い目で、こういうふうに向まく問屋がおろすものなのかどうか、私の希望的な観測が大変甘いものなのか、それとも全く可能性がない訳ではないと思いなのか、感想をお聞かせいただきたいです。

(古森さんの回答)

陳水扁さん自身は今年一月「四つのノー」の政策に変更はないと言いました。つまり「独立宣言はしない」「中華民国の名は変えない」「二国論を憲法に入れたい」、そして「統一か独立かを問う住民投票はしない」と。

このうち住民投票というものは最も民主的な方法ですね。中華人民共和国が言っている平和共存5原則の中でも、民族の自決がある訳ですから、「住民投票をやるんじゃないか」と言えば「結構だ」となるのですが、ただしその場合には中国全土の住民の投票にしなければダメだと言うんですね。つまり大陸の人も投票しなくてはダメだと、無茶苦茶なこと言う。だから台湾が住民投票を実施すれば、まずその第一段階で、中国は正面から阻止して来るでしょうね。武力による威嚇を含めて。

それからブッシュ政権が二期目に入っても、やはり台湾独立には反対はしないけれど支持もしないという可能性が非常に強い。だから間違いなく軍事の危機は起きますね。よって台湾独立という世界地図を変えるようなことは、そういう障害に耐えなければ実現しないかも知れません。

その時は日本も渦中に入るわけですから、日本の政権当事者などは「なるべくそういうことのないように」と祈っているはずですが。しかし日本側でも「自分たちの統治のあり方は多数決で決める」というのは民主主義の基本の主張として正論だと考えるでしょう。ですから台湾での住民投票という手段も私個人の心情としては是非そうしていただきたいと思うけれど、実際を見ると非常にリスクが高いな、という感じがします。

(質問)

私は日本人と結婚した元台湾人です。95年から99年まで上海に滞在しましたが、「大地の子」がいまだに中国で放送されていないんです。とりあえずNHKに問い合わせしたら、真っ赤な嘘が返って来ました。「日本と同時に中国でも95年に放送されました」と言うんです。あれを本当に中国で放送したら、共産党の一党独裁は絶対にすぐ崩れるから、放送できないのだと思います。ご意見をお聞かせください。

(古森さんの回答)

私は『大地の子』という本には何となく嫌な先入観があって、長年、手にしませんでした。ところが実を言うと北京駐在時代の終わり頃によく読んだんです。それからテレビ化分も全部見ました。確かに中国では一般には全然放映されていないですね。16歳まで中国で育ち、台湾の女性と結婚した日本人の30歳位の知人に聞いたら、「あの話に出てくるような、美しく生きられる人間は中国にいない。あんなふうには生きられるはずがない。すべて作り物だ」と言っていました。

北京でも良く、中国共産党の一党独裁はいつまで続くのかという議論をするんですが、失業が増えたから、不良債権が増えたからとかで「もう続かない」と言った意見もあるけれども、残念ながら私はまだ長く続くのではないかという見方です。たしかに共産党の統治システムのイデオロギーの部分はずでに空洞化しています。ご存知のように市場経済でやっている訳ですから、社会主義と言っても皆わからなくなっている。北京の街には「社会主義精神文明」という言葉が良く書かれています。「あれは何ですか」と聞いても「汚職しないってことですよ」という程度ですね。

ただ、共産党体制について良く思うんですが、権力を保つシステムの効率の良さは認めざるをえません。今旧ユーゴスラビアで、セルビア、スロベニア、コソボ、ボスニアなどがものすごい争いをしていますが、あれだけ衝突する原因はずっと前からあったんです。しかしチトー大統領の一党独裁の時には争いは一切、表面化しなかった訳ですね。そういうものを抑えて行くという、過酷というか冷酷というか、結果としての効率の良さは、残念ながら中国にはあります。やっぱり恐ろしいな、という気がします。力の世界と言いますか、自分たちに立ち向かう、自分たちから権限を奪おうとする人を平気で殺しますからね。中国民主党などは結成したというだけで中心人物は懲役14年です。新疆地区などの反政府の実力行動に対しては、すばやい死刑をもって対応します。

だから私は、中国共産党の体制はそう簡単には崩れないと思います。

少し雑談になりますが、私は2年間北京にいて、よく中国人と思われたんです。中国人みたいな顔をしている日本人と言えば、恐らく私は一番そうじゃないかと思う。北京では映画のDVDのニセ物を買っているんですが、私が一人で行くと皆ワーと逃げるんですよ。警察だと思うんですね。

ところがいざ日本人だとわかった途端に、中国人の反応が変わるんです。彼らの頭には「教え込まれた日本」というものがあるんです。これも一党独裁

の歴史教育の賜物です。日本の教科書にずいぶん文句を言いますが、では中国の教科書は日本について何を教えているかという、これが無茶苦茶なんです。戦後の50何年間の日本のあり方を全く何も教えていない。「1972年に田中角栄総理大臣が来て、日中国交回復の文書に調印した」と2行位出て来るだけです。日本が中国にいっぱいODAをあげていること、「憲法第9条があり、外国を攻めてはいけない」と一生懸命言っていることなど、全く書かれていない。

話からちょっとずれてしまいましたが、一党独裁の教育とはそういうものです。

(質問)

先生は今日、台湾と中国との経済交流が深まることで、台湾が中国に呑み込まれる不安があるとおっしゃいましたが、逆にそれで中国の体制を変えることはできませんか。

(古森さんの回答)

そう簡単には行かないと思います。経済だけを見ていると、一党独裁という、いわゆる共産党の原則からずれてしまっているように感じますが、政治権力を一党独裁の形で保って行くというなかでの政経分離ですから。ちょっと乱暴な言い方をすると、むしろ、逆に中国は台湾との経済の絆によって、総合的な国力を高め、その結果、共産党の基盤を強めて行くのではないのでしょうか。それこそ場合によっては、中国のその総合的な国力の強化が台湾に対して軍事、外交、経済その他で全面的に圧力をかけるうえでの、さらに有力な武器になるという危険性もあると、私自身は思います。香港の返還の時も、香港の民主主義が中国に広まって行くのではないかとの議論もありましたが、今の状況をみると全く違ってきます。

(質問)

ブッシュさんと小泉さんは一番波長が合うとおっしゃいましたが、それではロン・ヤスの関係は本当はどうだったのでしょうか。

(古森さんの回答)

これは中曽根康弘さんも全く同じことを聞かれて、「ロンとヤスよりは今の小泉純一郎とブッシュの関係のほうが親しい」と言っています。ただロン・ヤスとの関係は長かったですね。いろいろな問題があって、意見が対立せざるを得ない部分もありましたが、安全保障というところで繋がっていた。政策の部分でロン・ヤス関係による日米のきずなの方が強かったという考察も成り立つでしょう。しかし両首脳個人のレベルでの親密感という意味では、今の方があるという感じがします。

(質問)

ジャーナリストとして記事をお書きになる時に、自分の立場というものをどのように置いているのか。これはなぜかと言いますと、古森さんの場合には必

ず署名をしてお書きになるので、私どもは古森さんという方を良く理解して、記事を読ませていただくんです。ところが他紙の場合、かなり客観的なことを無署名で書きます。そうすると彼らのとっている立場が分からない。この点、ジャーナリストとしてどうあるべきなのか、お考えをうかがいたい。

（古森さんの回答）

ジャーナリストとしての自分の立場はどうかを簡単に申し上げると、その基準はグローバルスタンダードと日本の国益だといえるかもしれませんが。日本の国益だけでやっても、さらにグローバル規模で普遍的な価値を持つ民主主義というものがあります。アジア的な民主主義なり、西欧的、アメリカ的民主主義なりがあるという議論もありますが、民主主義というものはそもそも一つで、その基本は極めてはっきりしています。つまり統治される人たちが自由に意思を述べて、統治の仕組みを決めて行くということ、そのプロセスではいくつかの政治勢力が競い合うということです。

だから中国のような言論の自由を抑えるシステムを褒めることは、いくら流行であっても、やはり私にはできない。

私自身は北京から追放されても全然平気だと思っていたから良かったんですが、中国を専門にやっている人は、中国を批判して嫌われて、向こうへ行けなくなることを心配しています。そうなっては自分のライフワークが否定されてしまいますから。新聞社でも、中国語ができるということで中国専門ということや、北京に三年いて、東京に帰って五、六年いて、その後今度は支局長で三年行くというようなケースが多いんです。そのようなプロセスで、中国に嫌われることを書いたら大変なことになる。学者なんかもそうなんですよ。

これはアメリカの学者でもそうです。その代わりジャーナリストには、中国に詳しい人はいても中国専門という人はまずほとんどいません。

その辺は中国の日本担当者などはよく知ってしまして、必ず「何か変なこと言ったら仕返しするぞ。ビザを出さないぞ」と暗に脅かします。脅かされた側は自粛してしまふ。そういうことがメカニズムとしてできているんですね。

ところがワシントンに、たまたま付き合っていた中国の人がいまして、彼はアメリカだけが担当で、日本などあまり視野にないんですが、私が「これから中国に行く」と言ったら、「中国で政策を批判するのは構わない。あまり気にせず、どんどん書け」と言うんです。つまり中国では日本担当者だけが「中国を批判してはだめだ」という雰囲気を作っていることがわかったんです。欧米の新聞は、中国政府の政策批判をどんどん書いています。

ただその中国人は「政策批判は構わない。ただしやはり書かないほうがよいことはいくつかある」と注意してくれました。それらはなにかというと、たとえば、江沢民氏個人への攻撃、誹謗などでした。今から思うと、この人物の助言は非常に当たっていました。

産経新聞のために言えば、私が中国に赴任する前に会長や社長を中心に編集の人間が多数、集まった時「報道内容によって私が中国から追放されても、産経新聞はそれで良いですか」と聞いたら、会長が「良い」と言ってくれたの

です。こうした言質を与えてくれたことは、私にとって非常に心強い支えでした。

以前台湾に軍事情報を流していた人民解放軍の将軍が捕まって、処刑されたことがありました。中国が96年に台湾海峡でミサイルを撃った時に、李登輝さんが「あれは空砲だから大丈夫だ」と言ったんですが、ではなぜ空砲と分かったのか。これから先は又聞き之又聞きですけれど、それはその将軍が「空砲だ」という情報を台湾側に流したからだと言うんです。そしてずっと辿って行ったら、スイスの銀行に何百万ドルかが入っていることがわかり、すぐに処刑されたんです。

それが共同通信か何かの記事になりました。ちょうどその時期に私は中国政府の人から「古森さん。色々あなたの書いた記事読んでいるが、どうして軍事問題ばかり書くんですか。産経新聞の読者が見たら、あなたを軍事オタクと思うかも知れませんよ」と日本語で言うんです。そうしたらもう一人が「いや、軍事スパイと思うかも知れませんよ」と言うんです。つい少し前にもスパイが処刑された、という時点で、つまり「あなたもヤバイよ」と言っているんですね。するとまた別の人が「冗談、冗談」と言って、別の話に変えてしまうんですが、そういう種類の脅し方が中国には随分あったんです。中国専門記者ではなくて良かったなと思います。

(質問)

これは意見ですが、日本の上の方では、最近かなり中国に対する認識というものが高まってきていますが、下では日本に対する中国の浸透策がかなり進んでいると考えてほしいのです。たとえば姉妹都市の多さですね。あれを使って日本の地方に対し、彼らは非常に巧妙に食い込んできています。このあたりを是非新聞に書いて警告してもらいたいのです。

(古森さんの回答)

その件については留意します。

(質問)単純にして素朴な質問で、しかも易者にたずねるようで恐縮なのですが、ブッシュは来年再選されるでしょうか。先生ご自身の感触はいかがでしょう。

(古森さんの答え)

こういう質問が一番困るんですね。客観的な判断を下す材料はだれにもまだないからです。それでもあえて、予測を述べて、結果が予測と異なり、後で「あの時あなた、ああ言ったじゃないか」と言われるのも、うれしくないですね。答える勇気がないのかと言われれば、それまでですが。

一年以上先の選挙の結果がわかるという人がいれば、それはインチキだという大前提で、どうしても答えろということならば、私はブッシュは再選されると思います。今もし再選か落選か、どちらかに大金を賭けろと言われたら、再選される方に賭けます。

以上終わり

日台医療ネットの作成にて哈台族、哈日族を増やそう

蕭 惻惻

台湾には哈日族が一杯。日本にも哈日族が台湾語、北京語を習って、台湾に行く時不自由しないように努力しています。20年前、日本に来た時は日本語を話さなくても、漢字を見て、生活できました。皆様の医師免許も漢字を見て合格されたと思います。しかし、英語圏の国に行くと横文字を見るだけ心細くなります。従って、日本人に対して、台湾の漢字、台湾人の顔貌は世界中他の所にはない親切感、安心感を与えてくれます。もし、台湾への旅、観光、買い物、美食以外、治安がもっとよく、旅先にもし体を壊して、病氣されても安心して医者かかれる案内があれば、もっと出かけやすいでしょう。

皆の母校の教授の多くは日本で卒業或いは留学されました。日本の留学を終えた後台湾へ戻り、各大学病院にて教授、或いは科主任になって指導立場になっている知り合いも多数います。こんな様に日本に生活経験あり、日本社会に了解も多少ある先生方を中心に、10月18日台湾から来る台湾医師会の先生達に日本観光客の健康相談と旅先医者として活躍していただければ、日本の方々は台湾へもっと遊びに行くでしょう。会員達を始め各自の先輩や友達に趣旨を説明し、台湾医師会の先生方の力も借りて、引き受けてくれる先生のリストを作成し、台湾にはこれほど日本語話せる医療専門家がいると日本友人を安心させることをやってみませんか？

何謂「中国人」？

劉 文玲

前年陳隆志教授演講會後懇親會的餐席上（演題是「台湾加入聯合國」）、同席的一位女性（由談話知道是河洛人、看外表大概比我多不了幾歲、四十歲左右）為自己不理解台灣歷史表示慚愧、也對台灣加入聯合國表示贊同。在那個場合演講者、主持者都使用河洛語、餐會的 Back Music 也是台灣民謠、那位女性在談笑中、不解的問我「們真『徹底』、這樣只強調自己是台灣人、們不覺得有点『可惜』？看『我們中国人』・『炎黃子孫』、是多值得自傲的事、有『五千年』悠久的歷史文化 --- 」、我只有二個字『絕句』。我們不能責怪這位女性、這是四、五十年来教育的影響。在我們的成長過程中、受到

的是純正的「中国教育」。半世紀以來我們這一代的台灣人、幾乎大半已被教育成「中國人」、與五十年前我們祖父那一代被大日本帝國教育成「日本人」一樣。

的觀點、讓我看到十多年前自己的影子。雖然自認為是台灣人、但是在精神上却深受「中華思想」的薰陶而不自覺。

這番話令我深思何謂「中國人」？台灣人的定義十分簡單明瞭、現在具有 R.O.C. 政府的國籍自認是台灣人的話、就是台灣人。河洛人、客家人、原住民、包括外省人、在這一點並無差別。但是何謂「中國人」？由省籍概念來看、辺境のヴィグル人、チベット人、蒙古人也都是中國人、但並不是所謂的、炎黃子孫的「中國人」、我想那位女性所謂的「我們中國人」並不包括藏、回、蒙人、而是蘊孕着和日本「大和民族」有相對意義的「漢民族」之意。但是所謂漢民族、廣東、山東、四川、上海、福建 ----- 等地互相語言不通、生活習慣也不同、要斷定為同一民族也感到十分躊躇。

在現今的台灣、無意識下說「我們中國人」這句話的大半的台灣人、並非出於所謂統獨意識。他們口中的「中國人」、不是國籍、也不是民族、而是具有一種「共通思想」基盤的一群人。以「中華」為最高信奉的無形之偶像、可以說是接近於信仰集團。以自稱五千年悠久歷史文化而自傲、對週邊民族具有強烈的相對優越感、自認中國人是世界上最優秀的民族。在這半世紀世界中受到「純度最高」的「中華主義」教育的「中國人」、值得諷刺和悲哀也是「台灣人民」（尤其是三、四十歲台灣的中年層、青年層）。

現狀下、台灣已十分的獨立了、除了未加入聯合國之外、台灣在政治、經濟、軍事上已充分的獨立了。所以大半的台灣人還是希望「維持現狀」。但是我認為台灣從中國獨立的意義（這句話有語病、或將其改為「台灣獨立的真正意義」）是精神上的獨立、在精神上脫下「榮光燦然」的中華歷史文化的優越感的外衣、才能得到國際社會的認同。否則在外國人的眼底、台灣與中國問題只是「兄弟けんか」、「コップ中の嵐」而已。台灣獨立最大的障礙、不是中國共產黨、也不是國際情勢、而是台灣人自己。台灣人確立自己共同のアイデンティティ、建立自己的民族自尊與自信、還須要一段時間、還須要更多的努力。在此之前、中國尚未出現「民主的政權」、對台灣而言、未嘗不是件值得慶幸的事。

「西安寸劇事件」について

岡山 文章

西安寸劇事件の報道をみて、20 数年前に私が経験した宴会の記憶が頭の中をよぎりました。

私が日本に来て二年目の夏の事でした。初めて参加した宴会の席で、ずっと隣りに座っていた同期生が途中で突然姿を消しました。トイレにでも行ったか

と思ったら、数分後になんと舞台上に現れたのです。いわゆる寸劇の始まりです。彼は、踊りながら、服を脱ぎ、赤いふんどし姿になりました。そして彼は最後にふんどしをはずし（それは「氷の微笑」中のシャロン・ストーンの足の組み替えに匹敵するくらい一瞬だった）その芸は終了しました。勿論会場では男女とも盛り上がりが頂点に達し、その余韻はその後2～3日も続いていました。私にとって初めての経験なので、印象は鮮烈でした。年末忘年会の時に、同僚達は彼に思わず「また、やってくれる？」と聞いていました。

西安の西北大学の日本人留学生達もサービス精神旺盛で、独特の「日本式寸劇」を出し、一年一回の大学文化祭を最高の舞台として、日中友好への希望を表現したかったのに、結果的には退学処分に処せられ、関係のない仲間の留学生までが殴られ、寮の部屋も荒らされただけでなく、反日街頭デモ、中国政府による日本大使館へのクレームという事態にまで発展してしまいました。

もし中国人がこの「寸劇」を、単に異文化との遭遇ととらえることができたならば、かえって日本との実質上の文化交流の始まりにもなったはずでした。しかしこの数分足らずの試みが今回のような悲劇的な結果を生み出してしまったのは、相互理解における深刻さが不足し、また文化交流の心構えが欠如していたからだと考えざるを得ません。国の文化は人間の顔と同様、それぞれです。よって異文化交流は、相互が信頼し合い、理解し合い、受け入れ合うとのスタンスでないかぎり成功しないどころか、開始することすらできないはずです。

中国で留學生活を送るにすぎない4人が、勉強の合間に考えついた芸の問題は、わずか1～2日間の歪曲報道によって、あっという間に広大な中国全土に広まり、社会問題、そして外交問題にまでなりました。そして中央政府からは重大処分がなされたのです。「純情一心」だけで心は通じ合えないのは分かりますが、それにしても哀しいことです。

もし中国政府及びマスコミが、日本で詳しく報道された寸劇の真相、留学生達の真意及び事件後彼らのこうむった被害の事実を中国全土に公表したら、それこそ最大の交流と言えますが、一切そのようなことは行われませんでした。

「日中友好」の為のコミュニケーションのあり方をめぐっては、反日感情の改善という問題だけではなく、もっといろいろな面で再検討する必要があるでしょう。

では“台湾であの寸劇を上演したらどうなるか”ですが、台湾人はもともと親日的であり、また国中哈日族が多いだけでなく、韓流’の人もいれば、たまに‘五星紅旗’を持って、総統府前の大通りをぶらぶらしている人もいることからわかるように、寛容で多元的な社会ですので、この様な騒動が発生することは考えられません。ひょっとしたら、私と同様、‘もっとやってくれ’と願う人も沢山現われるかもしれません。

内 観 心 法

徳泉 治

1月18日夕方に突然倒れ、救急車に運ばれて、6時間の緊急手術を受けました。2日後気がついてから、毎日真剣に生と死のことを考えています。3日前、塩沢先生に感想を發表しませんかと言われたら、はじめてその気になりました。

孔子曰く“朝聞道夕死可矣”、道を聞いていないのに死んではいけないという意味でしょうか。早速、その“聞道”の中身を自分なりに探り始めました。まず少年時代からの疑問で、人間は何の目的で世の中に生まれ生きるのでしょうか。人間の本質は体や心（精気神）以外には何があるのでしょうか。宇宙11次元の中には人間が1次元の鉱物、2次元の生物を経て、3次元に生きていると上井先生に言われています。熟睡や死亡の時には4次元以上の世界へ一時的に行きますが、目覚めや肉体輪廻でまた3次元に戻ってきます。3次元を通り抜けて解脱するには何か必要でしょうか。

仏教の修行は一般的には内観と定力があります。定力の修行は精神力のコントロールを鍛えて念力が神通に発展します。内観はただ客観的に現時点自分の肉体や心念の変化を細かく観察分析体験する（正念）ことによって、“無我”を悟って、執着心を無くすことです。佛の悟道は内観にあると言われています。ここでは内観修行の概略を段階的に述べてみましょう。

- 1 . 名色分別智 (nama rupa pariccheda nana) — 現時点の肉体と心理状態別々にあると認知する。譬え座る姿勢は肉体状態か心理状態か、その変化を察して真実を見る。
- 2 . 把握因縁智 (paccaya pariggaha nana) — 肉体と心念は互いに因縁関係があり。譬え同じ姿勢が苦になったら、姿勢を変えようと思う心念が生まれて肉体を動かすなど、絶えずに因果関係を繰り返す。
- 3 . 遍知智 (samāsane nana) — 1秒間に20コマが動く映画画面より肉体心理状態の生滅はもっと速い、連続性に隠れた過去現在未来の無常を認知する。
- 4 . 生滅随観智 (udayabbaya nana) — 肉体、心理状態生滅の速さは、高度な警覚でその変化瞬間の境目をつかむ。3次元を抜ける時に喜びを感じると言われる。念力の強い人が超能力も現れるので欲望に流されると魔になる。（十種魔—楞嚴經）
- 5 . 壊随観智 (bhanganupssana nana) — 正念がさらに強くなればなるほど肉体と心の消失が強烈に感じられる。
- 6 . 厭離随観智 (nibbida nana) — すべての物事は実体がなく（夢幻泡影—金剛經）、執着すれば恐怖、不快、危険ばかりになると分かって、執着心の対象がだんだんなくなってくる。

7 . 行捨智 (sankharupekha nana) — 執着、未練が完全に捨てられ、強い正念正

見は常に働いて、外観は変わらなくとも心は喜びに満ちて静である。

今まで経験した

“我”は存在しないと分かったので、生死の恐怖から解脱できる。

道家曰く“精生氣、氣化神、神還虚、虚合道”、まさにその内観の法則に合致していませんか。孔子“聞道”の内容はどうでしょう。

山

富 士

劉 国揚

日本一の名山“富士山”が昔“不二山”(ふじさん)と呼ばれていたそうです。明治 28 年(1895 年)我が台湾は馬関(マクアン)條約(下関条約)により日本帝国領となり、新たに“不二山”より高い山が現れたのが新高山(にいたかやま、現在名、玉山・標高 3997 m)です。よって、富士山と改名されたそうです。

「新高山登れ」も歴史に残っております。

観 劇

岡山 文章

× × ×

去年年底，全家到英国倫敦度假，白天走訪倫敦街頭、西敏寺、海德公園、故ダイアナ妃旧居、大英博物館 ----- 等，晚上選了兩部ミュージカル觀賞，第一部是「My Fair Lady」(窈窕淑女)，也許是時差的影響(到達倫敦的隔天晚上)，也許是我們經常看的電影版「窈窕淑女」演的太好，真正的原因大概是自己的音樂素養不足，反正，我在 3 個多小時的演劇中昏昏沈沈的睡了幾次，回到旅社，被家人埋怨了一頓，因為他們聽到了背後座席的耳語：「He is sleeping」，好在沒有打鼾，否則馬上接到「Red Card」退場。

第二部是回日本的前一天晚上看的「レ・ミゼラブル」(孤星淚)。雖然不了解英文歌詞，又沒有日文或中文字幕，看完歌劇後，我情不自禁地衝去買 CD，整個晚上，腦海裡不斷地迴響著劇中的音樂-----。這部ミュージカル從 1981 年倫敦初演，已持續將近 20 年，整個劇院還是座無虛席、充滿熱氣，除了感嘆音樂的威力沒有國界以外，我不得不佩服法國大文豪ユーゴ的魅力。

× × ×

每年的 7 ~ 8 月及 12 月中，醫院得辦個納涼會及忘年會，以便和職員們聯誼及慰勞。揮不掉倫敦的回憶，我試著跟醫院的職員及護士們提議「要不要去聽ミュージカル“レ・ミゼラブル”？」雖然有幾位職員已看過數次(最高記錄 4 次)，他們都興奮地贊成這個 idea，當天(7 月 30 日)，雖然是水曜日，當我

們一行 20 數名抵達東京帝國劇場時，館內已坐滿了聽眾，擠得水泄不通，而且百分之九十以上都是女性。3 個多小時起起伏伏的劇情中，隨著山口祐一郎（ジャン・バルジャン）、今拓哉（ジャベール）的演技及歌聲，從希望到絕望，大半的職員陪著掉了一大把眼淚，最後再由絕望轉為希望及新生中結束。

離開劇院，望著周圍的大量女性觀眾，同行的唯一男性 staff 悄悄地跟我說：「日正當中的這種現象，可以說明為甚麼日本女性的平均年齡比男性多 5 歲。-----」

レ・ミゼラブル

法国文豪ユーゴ在 1862 年發表「レ・ミゼラブル」（孤星淚）。小說中登場的人物包括司教、服刑囚、娼婦、娼婦的小女兒、警官、法国共和派的青年們、巴黎街頭的小孩等社会中最底層的人民。故事的背景是法国大革命（1787 ~ 1799）後、君主制度和共和政權交替出現的動亂時代。只為了偷一片麵包去救助瀕臨餓死的家人而被監禁了 19 年的ジャン・バルジャン在 1815 年出獄，自由之身的ジャン好不容易找到一家修道院讓他吃飯和住宿，隔天一大早他偷了銀食器逃走，不幸馬上被警方逮捕、送回修道院。慈悲寬懷のミリエル司教，不但沒有揭發ジャンの罪行，反而向警方說明銀器是他送給ジャンの礼物，此外，他還再追加送給他銀燭台，並交代ジャン：「God has raised you out of darkness. I have bought your soul for God!」

將近 20 年的囚獄生活，加上整個法国社会加在民衆身上的重担及压制，使ジャン・バルジャン对任何人都不信任，可是，司教的寬容、溫暖和信賴，給ジャン莫大的衝擊，他決心開始新的人生。ジャン努力創業、終於成功、當上市長。可是，為了拯救代替自己、冤枉被捕的人命，他放棄市長的職位，到法廷自首，再度入獄。為了實踐对死去的娼婦ファンティエヌ許下的諾言，他脱獄去救出ファンティエヌの小女兒コゼット。在警官時時刻刻不停的跟踪追捕下，父子相依為命，躲躲藏藏地在巴黎、撫養コゼット長大成人。

1832 年，コゼット在巴黎街頭和參加巴黎バリケート戰的共和派青年マリウス不期而遇，墜入情網。ジャン冒著生命危險從バリケート血戰中把昏迷不醒のマリウス救出。犧牲割捨唯一的親人コゼット、去成全マリウス和コゼットの恋情，自己選捫過孤独寂寞的晚年-----。劇情中充滿了对社会弱者的關心及熱意，全篇一直迴繞著人性的光輝（人間愛、互信）、以及追求理想的執着。

× × ×

「レ・ミゼラブル」問世後，除了小說之外，以兒童書、電影、ミュージカル等各種方式流傳於全世界，到今天為止，不知賺了多少人的熱淚。其原因除了故事本身感人之外，還有一個重要条件，那就是讀者和聽眾有共鳴的素養。所謂「表錯情、会錯意」，雖然沒表錯情，也得擔心是否「会錯意」。ユーゴの理念是：「終止君主的殺生大權、暴政及压制，讓社会中的男性有職業、小孩受教育、

女性得到社会的温情，全人類享受自由、平等、友愛、麪包及思想 -----」。這樣的觀念，在這 1～2 百年中，一直延續著、並支持和發展成一個「生存權優位」的現代文明民主社会。

我們幸運地生活在這個文明思想體系中，從早到晚，社会中的每一個人站在自己的崗位上活動，從天色未明中就開始忙碌的送報生、到下班後和同事們喝完酒搭最終電車半夜回到家裡的サラリーマン，每天都有新的悲歡離合。而整個社会、世界也悄悄地、緩緩地、但是不停地往好的方向移動，我們也在不知不覺中增加年齡。也許，那一天，我們也都會擁有屬於自己的「？感人的」 「レ・ミゼラブル」。

台 医 連 広 報 部 さ と 医 も 便 り

第 二 回 会 員 ア ン ケ ー ト の 結 果

回収率：25.5 %

- 1 . あなたは一日の診療仕事に対して（報酬に関わらず）満足していますか

非常に満足	まあまあ満足	物足りない	つまらない
2.8 %	72.2 %	19.4 %	5.6 %
- 2 . あなたは診療所の staff に満足していますか

誇りを持っている	普通	改善の余地あり	悩んでいる
13.9 %	47.2 %	33.3 %	5.6 %
- 3 . 今後 5 年間、あなたの診療設備の拡大の見込みはございますか

十分あり	有るかもしれない	ないと思う
2.7 %	35.1 %	62.2 %
- 4 . 日本では、5 年後の診療報酬は改善しますか

楽観的	あるかもしれない	現状維持	下がる一方
0 %	0 %	10.8 %	89.2 %
- 5 . 10 年後の日本、医者はいいい職業ですか

はい	何とも言えない	いいえ
5.3 %	60.5 %	34.2 %
- 6 . 10 年後の日本、歯医者はいいい職業ですか

はい	何とも言えない	いいえ
3.2 %	54.8 %	42.0 %
- 7 . SARS 流行期間の“台湾人医師の関西旅行騒ぎ”事件は、あなたの診療

に影響しましたか

はい	感じない	わからない
5.6 %	86.1 %	8.3 %

8 . “台湾人医師の関西旅行騒ぎ”事件について、日本の反応にあなたはどのように思いましたか

過剰反応	適切と思う	わからない
55.3 %	44.7 %	0 %

9 . SARS が日本に上陸しなくて幸いでしたが、流行騒ぎの間、あなたはN95以上の

マスクを用意していましたか

はい（使いました）	はい（使わなかった）	いいえ（かわりのものだけ）
2 %	36.8 %	57.9 %

10 . 台医連の執行部は会員名簿の発行を検討していますが、名簿の内容についてのご意見

発行の必要性はない 21.1 %

ご意見：※名簿業者に悪用される可能性大きい！ 発行したい気持はわかる、でも…

多一仕事多一件煩悩（DM,セールス、勧誘、募金、電話相談…こまっています）。

※一旦造冊、絶対会漏出去、只有壞處没有好處。多利用電子メール傳達信息、不必

郵送。長遠的眼光来看、将来也要讓抱有共感的日本人参加。

氏名、出身校のみ 氏名、出身校、電話番号 氏名、出身校、住所、電話番号

3つ併せて68.4 %

ご提案：※専門、日本の出身医局、e-mail、氏名（日本名、中文名）などを加えること。

回答なし 10.5 %

ご提案：※実用性を考慮した名簿なら賛成する。（自分の専門分野のPR、勤務先の診療時間

、住所、Telも含むものもいい。布施政庭、元山逸功先生が考えたシニア会の普及版？）

以上、第二回会員アンケートの結果を公表させていただきます。ご協力の方々に心から厚く感謝を申し上げます。今後も皆様ご関心の話題を中心としてアンケートを行いたいと存じます。どうぞ引き続きご協力をお願い致します。（うたさと）

会のお知らせ

- 1) 望眼欲穿、待望已久黄焜璋院長先生有関SARS的演講文稿日譯版、經數位同仁不眠不休、日夜一工、即將上梓。当日向隅的會員以及日方友人同業者、將如臨現場般、分享第一手資料。謹向為此獻身者致最大敬意、哀禱。
- 2) 産経新聞社駐美特派員古森義久先生於平成15年8月10日举行的演講會全文稿、業經本人過目認可、除了刊載于本會會刊之外、將轉載于“台灣週報”上。
- 3) 台灣近代政治史研究學者若林正文先生將於平成16年2月1日(日)臨本會、為大家作一演講會。
對於若林先生、我想大家略有耳聞、他是“G-Y對立軸”、“台灣大巡禮圈”、“中華民國第二共和制”等等的創諸。目前流暢有市面的“2・28事件”的作者何義麟先生就是若林先生的得意門生。(東昌明)

編後語

新年あけまして おめでとうございます

新春特大号を生むにあたり幾分遅れて申し訳ない。新しい年を迎えながら、どんどん新しいことがかかって来る。SARS講演会中の learn new model は中年の私たちに投げかけた言葉だと思わざるをえない。

先日、台湾から一通のプライベートの手紙が届いた。Season's greeting と同窓会の誘いの内容だったが、追伸に“返信する際、あて先に『中華民国』でなく、『台湾』と書いてください。お願いします”とあった。潜んでいる台湾意識のマグマが動き出していると匂わされた。20年前に“以民導官”の潮流が台湾の経済発展に大役を果たしたことを思い出しながら、水能載舟、水能覆舟、今度“以民護官”の洪流は台湾主権の正常化をどこまでもたらずかは、台湾人の器量しだいだ。

SARS騒動は台湾人医師の関西旅行事件にとどまったが、2003年の医師カレンダーは例年と様変わった。インフルエンザ予防注射のワクチンは前年より多く用意されたと言われていたが、やはり早々と品切れが騒がれた。北米の大流行にも拍車されたが、SARSという未遭遇の新型肺炎への怯えは言うまでもない。台湾でSARSと戦った医者たちに敬意を払いながら、謙虚に、その貴重な経験から学び、さらにそれを日本の同業医師にも分かち合ってもらうことは、正に我が日本台湾医師連合創立の宗旨と使命ではないか。(頌彦)